

第 11 回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「どうして」

宮城県 秀光中等教育学校2年 川上 雅子



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞



優秀賞〈銀の星賞〉

『どうして』

宮城県 秀光中等教育学校二年 川上 雅子

小学四年生の光汰は、クラスのいじめられっ子です。今日も教室の自分の席で、一人読書をしています。光汰が本の世界に入り込み、周りが目に入らなくなったそのときです。

「あっ。」

光汰の手から本が抜き取られました。驚いて顔を上げると、目の前にはにやにやといやらしい表情を浮かべる剛つよしの姿がありました。剛はいじめっ子のリーダーです。手には光汰の本が。

「返して！」

光汰は立ち上がって手を伸ばしました。しかし、剛はひょいと高く持ち上げてしまい、背の低い光汰には届きません。ぴょんぴょんとどび跳ねる光汰をおもしろがっている様子です。

剛は本の題名を見ると、クラス全員に聞こえるように声を張り上げて言いました。

「『くまの子クウ』だってさ。四年生にもなってこんなおこちゃまの本かよ。」それを聞き、クラスの男子たちは一斉にげらげらと笑います。光汰は顔が熱くなるのを感じてうつむきました。

「ほら、見てみるよ。」

剛はひょいと男子の一人に本を投げました。

「ああっ！」

光汰はあわてて追いかけて取り返そうとします。しかしその男子も、光汰が自分の周りをぴよこぴよこと跳ねているのをおもしろがっているのです。

「ほらよ。」

今度は、さらに別の男子が本をキャッチしました。光汰も急いで追いかけます。



本は光汰をもてあそびながら、次の男子、次の男子へとクラスをめぐるていきました。

光汰がさすがに追いかけて疲れたとき、本は隼人はやとの手にありました。

「ハヤトくん……。」

光汰の幼馴染おさなじみの隼人は、何でもできる頭の良い子です。そして光汰とは大の親友でした。しかし、四年生になってから、隼人はいじめっ子グループの中にいます。

隼人は光汰とは目を合わせずに、次の男子に本を手渡しました。その男子は本を受け取ると、大声で言いました。

「みんな、見てろよー！」

ゴミ箱の方向に向き直ると、大きく振りかぶります。光汰が止める間もなく本はその手を離れました。きれいな放物線を描き、ドサツ、とゴミ箱に入る音がしました。

「ナイスシュート！」という剛の声が聞こえました。

光汰は学校の帰り道をとぼとぼと一人で歩いていました。

「どうしてみんなぼくをいじめらんだろう。それに、ハヤトくんまで……。」
光汰は、はあ、とため息をつきました。

「コウちゃん。」

突然、光汰を呼ぶ声が聞こえました。驚いて振り向くと、隼人が走ってくる姿があります。

「ハヤトくん！」

「しっ！」

思わず大きな声を出した光汰を隼人はさえぎりました。

「そうだよね、ぼくと話しているの見られたら、ハヤトくんもいじめられちゃうもんね。」

隼人はそれには答えず、肩で息をしながら言いました。

「コウちゃん、今日は、ごめんね。今はあいつらのグループにいるけど、でも、俺は本当は、コウちゃんの味方だから。それだけ言っておきたい。」

そう言いきると、立ちつくしている光汰をおいて、走り去ってしまいました。



次の日の朝、光汰は通学路を歩いていました。いつものような重い足取りではありません。隼人が本当は光汰の味方だと聞いて、ほんの少し心が軽くなったのです。

光汰の前の方を隼人が歩いているのが見えました。光汰は駆け寄ると、周りに人がいないのを確認してから声をかけました。

「ハヤトくん、おはよう。」

「……。」

隼人はちらりと光汰を見ると、逃げるように去って行きました。

「……だれか、見たのかな。」

光汰はそう呟くと、とぼとぼと再び歩き始めました。

その日学校で、光汰は隼人の様子がいつもと違うことに気が付きました。

「剛ってさあ、調子乗ってるよな。俺らに命令ばかりして。」

「あいつの言うこと聞くの、もうやめようぜ。性格悪いし。」

隼人はいじめっ子グループの仲間に、剛の悪口を言いふらしているのです。

「そうだよな。」と同調する男子もいれば、こそこそと剛に報告する男子もいました。

「ハヤトくん、どうしてあんなこと言うんだろう。悪口なんか絶対言わないのに。」

光汰は不思議でした。そしてふと、昨日言っていたことを思い出したのです。

「もしかして、ぼくのために……。」

光汰は、隼人が一人になる瞬間を見計らっていました。そして、放課後になつて、やっと二人きりで話すチャンスを見つけたことができました。

「ハヤトくん、あのさ、今日どうしてあんなこと言っていたの？もしかして、もしかしたらただけど、ぼくのため……？それなら、そんなことしないでいいん……。」

一生懸命話す光汰を、隼人はさえぎりました。



「何か誤解しているようだけど、どうして俺がお前なんかのためにそんなことをしなくちゃいけないんだい？ それから、光汰といると俺までいじめられるかもしれないだろ。近寄らないでくれ。」

隼人は冷たく言い放つと、足早に去って行きました。

「ハヤトくん……？」

光汰は涙が出そうになるのを必死でこらえました。今まで見たことのない隼人の冷淡な表情が何度も思い起こされました。

次の日から、クラスの男子は全員隼人を無視するようになりました。また、隼人も完全に光汰を無視しました。

「ハヤトくん、ああ言ってくれてたのに。」

光汰は隼人の行動に傷つき、毎日沈んでいます。剛たちは、たいして反応しない光汰にちょっかいを出すことが少しつまらなくなってきました。

そのころ、生徒たちの間ではカードゲームがはやっていました。もちろん光汰のクラスも例外ではありません。光汰と隼人を除く男子たちは、休み時間ごとにカードゲームで盛り上がっていました。

あるとき、クラスの男子の一人、祐一郎がとてもレアなカードを手に入れました。他の男子たちは口々に「いいなあ」と言っては羨ましがっています。

祐一郎も気分がよく、誇らしげに自慢しています。

そこで、どうしてもそのカードが欲しくなった剛は言いました。

「祐一郎、俺のカード五枚やるから交換しようぜ。」

しかし、祐一郎はあわてて首を振りました。

「いくら剛でも、このカードは交換できないよ。」

それでもあきらめられない剛はさらに言いました。

「それなら、好きな十枚やるよ。十枚なら文句ないだろ？」

祐一郎は、始めは驚いた顔をしました。それでももうなすすきませんでした。「やっぱりこのカードはあげられないね。」

一瞬、何人かは剛が怒りだすのではないかと思いましたが、しかし、タイミング良く担任の由梨先生が教室に入ってきたので、皆自分の席へと戻りました。



その日の放課後です。掲示係の光汰は由梨先生に言われて、教室の後ろの壁に皆が授業で書いた絵をはっていました。皆帰ってしまい、教室には光汰の他にだれもいません。

ガラガラ、と扉を開ける音がし、光汰は（由梨先生かな）と思いながら振り向くと、入ってきたのは隼人でした。光汰は一種の気まずさを感じながら作業を続けました。

隼人はまっすぐ祐一郎の席に行くと、道具箱を出して中をあさり始めました。

「何してるの？」

光汰は驚いて声を上げましたが、隼人は返事をしません。

隼人は道具箱の一番奥から何やら取り出しました。それは、あのレアなカードでした。隼人は、今度は剛の席に行くと、それを剛の道具箱の中に入れてしまいました。

「ハヤトくん……、隼人君、何やってるの？」

啞然^{あぜん}として光汰は聞きました。

「見ての通りだよ。明日何が起こるか楽しみだね。」

光汰は久しぶりに隼人の声を聞いたような気がしました。

「剛に目に物をみせてやるんだ。光汰にとっても、見ているだけで剛に仕返しができるんだからいい話だぜ。明日、まさか俺がやったなんて言わないよな。まあ、気の弱いお前にそんなこと言えるはずないか。」

隼人はそう言って鼻で笑いました。

（隼人君は、もう前のハヤトくんではなくってしまったんだ）と光汰は感じました。

次の日の朝、剛が遅刻ギリギリで教室に入ってきたとき、クラスは大変な騒ぎになっていました。

「剛、人のもの盗むなんて最低だぞ！」

祐一郎が剛に向かって怒鳴ります。当然剛はわけがわからないといった表情です。

「祐一郎君、まず話を聞いてみなきゃ。それからよ。」
由梨先生が祐一郎を諭します。



そんな様子を光汰は自分の席からじっと見つめていました。隼人はみんなの輪に入って事の成り行きを見守っています。

「何のことだよ？ 何があったんだ？」

剛は必死になって言いますが、祐一郎を余計に怒らせただけです。

「とぼけるな。朝見たら俺のレアカードが無くなっていたんだ。もしかして思ってた見たら、お前の道具箱の中にあったんだぞ。」

これに驚いたのは剛の方です。

「そんなの今初めて聞いたぞ。俺は盗んでないよ。」

剛はあわてて言いますが、前の日のこともあり、光汰と隼人を除いてはだれも信じていませんでした。

「剛じゃなきゃ誰がやったっていうんだよ。」

他の男子たちも祐一郎に加勢します。剛は焦り始めました。剛がやったことになってしまったら、一人怒られるだけではなく、親まで呼び出されてしまうかもしれません。剛は少し考えてから口を開きました。

「そうだ、昨日光汰は掲示係で放課後残ってた。本当は誰がやったか見てたんじゃないのか？」

それを聞いて、全員の視線が光汰に集まりました。光汰はいつもよりさらに小さくなりながら、(剛が盗んでいるのを見たって言ったらどうなるかな)などとぼんやり考えていました。

すると、突然剛が大きな声を出しました。

「わかったぞ！ 俺に仕返すするために、光汰がやったんだ。これは光汰が仕組んだことなんだ！」

これには全員言葉を失いました。なぜなら、だれも光汰がそんなことをする子だとは思っていなかったからです。

光汰も、本当のことを言おうと思ったところでしたが、すっかりその気が失せてしまい、今まで剛にいじめられてきた数々のことが思い出されました。

「剛、墓穴を掘っただけだったな。早く祐一郎に謝れよ。」

にやっと笑ってそう言ったのは隼人でした。そしてその言葉で光汰は我に返りました。

ガラガラ、と椅子を引いて、突然光汰は立ちあがりました。皆驚いて、再び視線が光汰に集中しました。光汰は緊張しながら、一気に言いました。



「ぼく見ました。やったのは隼人君です！」

一瞬ののちに、クラス中がざわざわと騒がしくなりました。

「隼人君、本当なの？」

由梨先生が尋ねました。隼人は鼻で笑いながら言いました。

「もうばれちゃったのか。つまらないの。」

その後、光汰は剛に話しかけられることはないものの、いじめはぴたりとやみました。それに対し、隼人はますます皆から嫌われ、行いも悪くなる一方でした。

もはや光汰の知る隼人ではなくなり、またどうしてそうなってしまったのかも光汰にはわかりませんでした。

しばらくたったある日の放課後のことです。皆が教室で遊んでいる中、隼人は由梨先生に言われて、一人で教室の扉の掃除をさせられていました。

光汰はそれを見て、（もう一度だけ本心を聞いてみよう）と決心しました。雑巾を持ってくると、隼人の隣にしゃがんで、掃除を手伝い始めたのです。

隼人は顔を上げると、「コウちゃん」と微笑ほほえみました。光汰はその笑顔を見て、（ああ、元のハヤトくんだ）と安心しました。

「コウちゃん、ありがとう。それから今までごめんな。俺がどうしてこんな風になっちゃったか不思議だったろうね。」

光汰はうなずきながら、（でももう元通りだ）とっていました。

「俺、もうすぐ引越しするんだ。」

「えっ……？」

光汰は言葉を失いました。

「それで、みんなと別れるのがつらくて、心が不安定になっちゃって……。」
隼人はうつむきました。光汰は何も言えませんでした。

「さあ、コウちゃんが手伝ってくれたおかげで、もう終わったよ。早く帰ろう。」

そう言って隼人は立ち上がりました。光汰も立ち上がるうとしたそのときです。光汰の足に何かが引っ掛かりました。そして光汰は水の入ったバケツごと倒れてしまったのです。



光汰は自分の足元を見ると、自分の足に隼人の足がかかっているのが見えました。

「ハヤトくん……？」

びちゃびちゃになった光汰を見下ろしているのは、もう元の隼人ではありませんでした。

「あーあ、やっちゃったね、光汰。でも俺の仕事は終わったから、あとは一人でやってくれ。じゃあな。」

そう言って隼人は教室を出ようとしたが、立ち止まって振り返りました。

「あっそうそう、さっきの話、全部嘘だから。」

光汰の目からは涙があふれてきました。始めから手伝わなければこんなことにはならなかったと悔やまれました。

そのとき、光汰の目の前に手が差し出されました。光汰が驚いて顔を上げると、なんとその手は剛のものでした。

剛はそっぽを向いたまま言いました。

「立てよ。拭くの手伝ってやるから泣くんじゃねえ。」

「剛君……。」

光汰はその手をとって立ち上がりました。すると、クラスにいた男子たちがだれともなく集まってきて床の水を拭いてくれたのです。

「みんな……、ありがとう。」

光汰が言うと、剛は言いました。

「誤解すんなよな。俺は借りを返したただけだからな。」

他の男子たちは口々に、「それにしても本当に隼人はひどい奴だ」と言い合っていました。

次の日から、光汰は休み時間に男子たちから声をかけられるようになりました。

「光汰、一緒にカードゲームやろうぜ。」

「あの、ぼくやり方わからないから……。」

「いいから。教えてやるよ。」



始めは緊張気味だった光汰も次第に打ち解けていきました。(みんなと遊ぶってこんなに楽しいんだ)と久しぶりに思い出しました。しかし、反対に隼人は席で一人ぼっちでした。

それから数日後、隼人が学校を休みました。光汰は今まで学校を休んだことのない隼人が休むことが、内心気になりましたが、他に気にしている人はありませんでした。

その日の帰りの会です。由梨先生が皆に言いました。

「今日隼人君はお休みだと思ったでしょうけれど、実は家庭の事情で転校することになったの。本人の希望で、みんなに言わないでほしいということだったので、急なお知らせになってしまいました。」

それを聞いてクラスの皆は内心喜んでいましたが、先生の手前、それを表には出しませんでした。光汰はもうわけがわからなくなっていました。

光汰はさようならのあいさつの後、一目散に走り出しました。しばらく訪れていない隼人の家へと向かいます。

もういないんだろうか、という不安を覚えながら、自分の足の遅さを呪いました。

とうとう隼人の家が見えてきました。家の前には一台の車が止まっています。

「ハヤトくん!」

光汰は目いっぱい叫びました。すると、ちょうど車に乗り込もうとしていた人影が、驚いてこちらを見ました。

「コウちゃん!」

光汰は、はあはあ、と息がはずんでしゃべることができません。

「コウちゃん、俺があんなにひどいことをしたのに、来てくれたんだね!」

光汰は笑顔で答えました。

「……、今度こそ、元のハヤトくんに戻ったんだね。本当の理由、教えてくれるよね?」

すると、隼人は光汰に親指を突き出しました。

「うまくいったら?」

そうやって隼人は白い歯を見せました。

「え?」



「俺とコウちゃんの立場を入れ替えるのが、だよ。コウちゃんがいじめられているの、どうにかしたいとずっと考えていたんだけど、ちょっと前に引越しが決まったんだ。これはチャンスだと思って。どうせ俺はいなくなる人間だから、いくら嫌われてもいいだろ？ だから思い切ってやってみたんだ。予想以上にうまくいって、コウちゃんが皆の仲間に入れてもらえるようになってよかった。」

隼人は心底うれしそうに笑っています。光汰の目には涙が浮かびました。「じゃあ、全部ぼくのために……？」

光汰の頭の中に、今までの隼人の行動が走馬灯のように駆け抜けていきました。

「もう、コウちゃんは最後まで泣き虫だなあ。」

そう言うと、隼人は車に乗り込みました。

「もう行かなくっちゃ。コウちゃん、来てくれてありがとう。これからもうまくやれよ。」

光汰はなんと言ったらよいのかわかりませんでした。何とかこれだけ言うことができました。

「手紙、くれるよね。」

「もちろんさ。」

ブルブルルン、といてて車が走り出しました。

隼人は車の窓から顔を出して、笑顔で手を振っています。光汰も笑顔返そうとしますが、顔がくしゃくしゃになってしまい、うまく笑顔をつくることができません。

涙でかすんだ隼人の姿に向かって、光汰はいつまでも一生懸命に手を振り続けていました。